

FORUM '85 July 10-19



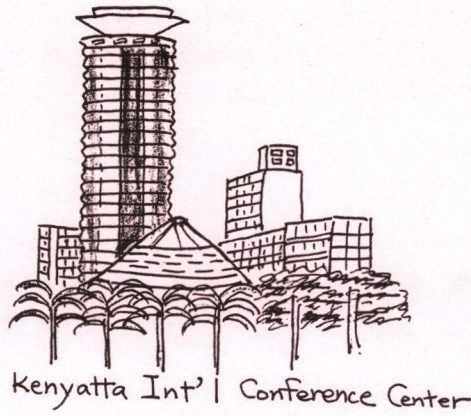
THE 1985 NON-GOVERNMENTAL
WORLD MEETING FOR **WOMEN**
NAIROBI, KENYA

私たちのナイロビレポート

1985. 7. 10-19



国際婦人年北区の会



私たちの「ナイロビ」レポート

* ナイロビから帰って	川西渥子	1			
* 私たちのワークショップ	寺本真名	2			
		正路怜子	森井久美子	風呂本惇子	5	
		後藤安子	神谷伸子	森良子	渡辺和恵	9
* FOURM85を読んで	岡 英子	11			
		金谷千慧子	小林明美	大河内滋子	13	
		一柳三貴子	田丸青実	片岡陽子	15	
		松村淑子	野田節子	山田初実	岡 英子	18
* 女の問題は政治の問題	楠瀬佳子	22			
		中居成子	石田法子	大塚野百合	24	
		米家佐奈恵	本多淳亮	金森千鶴子	26	
				西山 譲			
* 資料	日程	名簿					
* あとがき							

ナイロビ大学の構内をゆっくりと胸をはって歩くアフリカの女性。「国連婦人の十年」最終年のNGOフォーラムの会場は、肌や髪色の違う一万余の世界の女性の熱気にあふれていた。中でも赤や黄の強烈な色彩の民族衣装が褐色の膚によく似合うアフリカ女性の数が多いのが目につく。その自信に満ちたゆっくりした足どりに、十年間の確かな歴史の歩みを感じる。

「国連婦人の十年」の歴史は、北区の会の十年の歩みでもある。北区の会は、この十年間、三つのテーマの実現を目指し、学習や集会・デモ・ミニパンフの発行等大阪の片隅で、ささやかだが着実な活動を続けてきた。この十年間で何がどう変わり、何が変わらなかったのか。私達がとり組むべき課題は何か。この十年間の締めくくりとして、私達の会は、7月10日ケニアに出発した。

参加した一人々々、ケニアで得た印象や成果は違っていても、そこで出会った世界の婦人達の様々な困難を乗り越え 人類の共通の悲願である平和・発展・平等の目標に向かう明るいたくましい姿が私達に共通して深い勇気と感動を与えた。平和・発展・平等を求める世界の女性達の動きは、国境・人種・社会体制や発展の違いを越えて ここアフリカの地で、過去最大の婦人会議として結実し、今や滔々たる大きな流れになることを私達は肌で確認することが出来た。

北区の会が主宰した「日本における婦人の雇用」のワークショップも延べ百人余りの参加者を得て、成功裡におえることが出来た。

人類の何千年の歴史の中で、三つのテーマにむけての力強い歩みは今はじまったばかりである。ケニア大会では2000年にむけての将来戦略も採択された。私達の活動も新たな出発と飛躍が期待されている。

(弁護士)



1985フォーラム会場 ナイロビ大学

私たちのワークショップ

『 Women's Working Condition in Japan 』

寺本真名

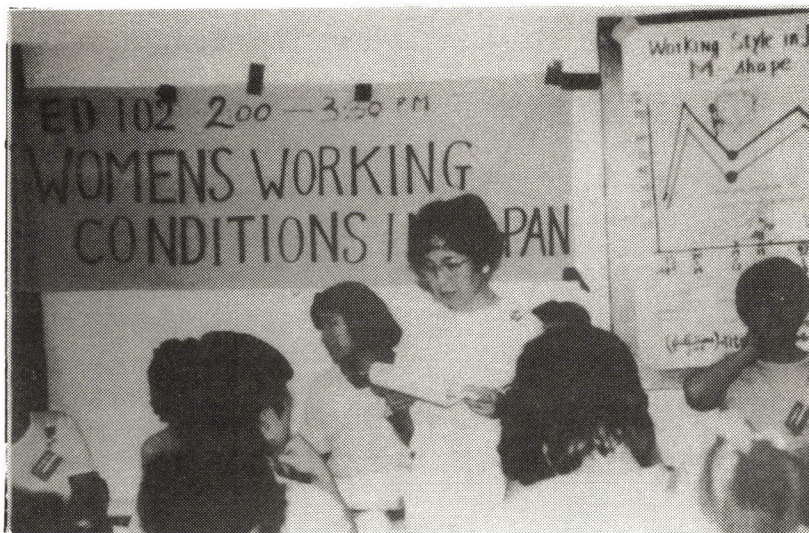
時・所 1985.7.15 14° ~15° 30' ナイロビ大学ED102
参加者 約 100名・・・日本人ほか ケニヤ26人 アメリカ10 デンマーク2
タンザニア2 フィリピン インドネシア 西ドイツ ザンビア
スウェーデン ベルギー インド ニューカレドニア 不明4

* みんなでもりあげたワークショップ

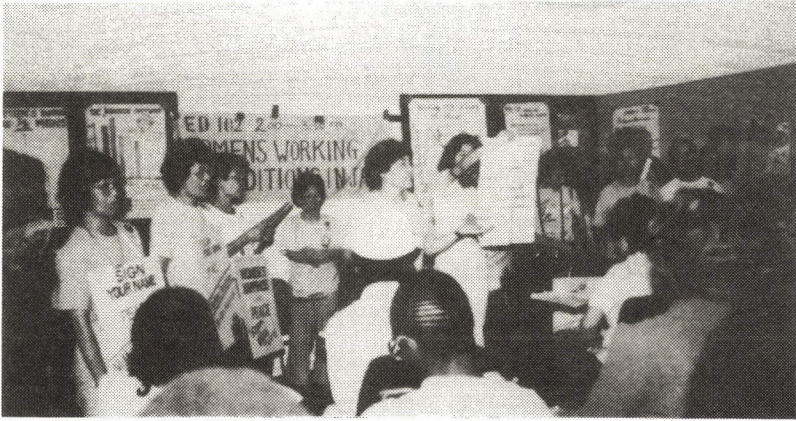
「NGOの集会って素晴らしいけど大変でした。コンタクトがとれなくて 前日までニューヨークの本部に電話をしたり イントネーションの違う英語はわかりにくいし 政府間会議と違って・・・」 「あごら」の斎藤千代さんにうかがっていたものの 全くその通り 1年前から計画し 申込みでは2番目だったといわれる私たちの場合も 予想以上にワークショップ、宿、飛行機の全てについて 変更や問い合わせに返事がこず 情報不足で全容がつかめなままナイロビに到着、15日のワークショップの部屋や時間がわかった時にはまずはほっとしたのです。

こうした悪条件にもかかわらず バラバラに見えても必要な時には一致協力する私達のグループが各々の才能を発揮 — 草木染めで全員のTシャツに美女をデザインして若返らせた一柳さん。 色鮮やかな3枚のノボりに棒まで持参の田丸さん。

「女の気持ち一雇用機会均等法に向けて」のビデオ上映のため骨折った野田さん。呼びこ



私たちのワークショップで寺本レポーター



みピラ作成の後藤さん。質問に即答できるよう資料カード作りをした楠瀬さん 風呂本さん。日本の働く婦人の状況が一目でわかるようにグラフを作成した金谷さん。

日本人離れた英語でワークショップを盛り上げてくださった大塚先生。英語での司会という大役を引き受けた米家さん 松村さん。—そして 呼びこみ、運搬、設営、受付、写真記録と全員の協力で 外のスピーカーの騒音で発言が聞き取りにくいというハプニングがあったとはいえ 40人の教室に100人近い参加者を迎え 後半にかけて討論も盛り上がり 終わった後も質問や意見をのべたり 資料を求める人々で熱気が残り それなりに いい集まりを持つことができたと思います。

* 日本の経済成長の秘密は女性の低い労働条件

さてそのワークショップの中身についてですが まず会長である川西さんから開会の挨拶とメンバーの紹介。正路さんから北区の会の説明、11年間のとりくみと成果、働く婦人の状況を報告。寺本、森井さんから民間放送、生命保険会社における採用、賃金、仕事、昇格などの女性差別と是正のたたかいについてレポート。

石田さんからは5月に成立した雇用機会均等法が実効性が少なく問題点の多いものであること、さらに渡辺さんから この法律の中には 労働基準法の改悪が含まれていることを説明。経済大国といわれる日本で 婦人労働者が厳しい労働条件におかれている現状を明らかにしました。 私達の発言に 西ドイツ、アメリカ、タンザニア、インドネシア等の7人から質問があり「どういふ組織が 政治的働きかけをするのに日本では有効か?」「日本における婦人議員について」「働く婦人の現状、組合の組織率、リーダーシップについて」「労働組合における婦人労働者教育」「北区の会は全国組織かどうか」「働く婦人の保育」「家事・育児を行う共働き婦人は多いのか」「日本の中絶の現状」などに及びました。 保育については参加者の中におられた大阪保育運動連絡会の横田昌子さんから答えていただきました。

* きわだった討論

このあと オレンジ色の聖衣をまとったシスターから「私はフィリッピン人です。日本にそんな差別があるとはショックでした。私達は日本などの男性によるセックスツアーに苦しんでいる。反対のデモを行っていることを知ってほしい。こうしたことをなくすために日本や他国の婦人と手を結びたい。」と発言。

続いて ナイロビ行きの飛行機の中で知り合ったインドの医師（男性）からは「インドで売春なくす会の責任者です。法律で禁じられているにもかかわらず人身売買も行われており 企業や警察が手を組んでいるために この問題が解決しない。」

これに応える形で 売春問題の保護更生にとりくんでこられた渡辺さんから「日本にもトルコ風呂など儲かる企業には銀行が金を貸し警察も取り締まらない。」と同じ悩み、問題を抱えていることを説明。ニューカレドニアの婦人からも「私達も日本の売春問題に反対している。なぜならニューカレドニアもフランスの植民地政策のもとで ビッグボスが利益を得るために日本と組んでいる。また フランスからの独立のためにも闘っています」

日本で13年間教師をしたことがあるというアメリカの女性は「日本と韓国の女性がセックスツアーに反対して 成田とソウル空港で顔写真をとるデモンストレーションをしたと聞いたが こうした方法がいいのではないか」と提案。 インドネシアの女性は日本は平等でないといっても権利意識があるから達成は早いと思う。インドネシアは権利について教育することから始めなければならず大変です。と報告。

日本男性の代表のような立場に立たされた本多先生は「日本からのセックスツアーについて大変苦々しく思っているし そう考える男性が多いことを知ってほしい。日本経済の繁栄は女性差別の上に成り立っているのです。」と発言。

最後に 婦人に対する差別撤廃も平和なくしてあり得ないので 平和のために一緒に「原爆ゆるすまじ」を歌いましょうという金谷さんの提案で 全員で合唱。

なごやかにワークショップを終えることができました。

* インターナショナルな視野を

ワークショップを終えて思うことは いかにかに討論できるテーマを選ぶかということです。私達はまず日本の実情を知ってもらった上で討論しようと考えたわけですが、経験を重ねた西欧アメリカの女性の場合 どうすれば第3世界の人々と連帯できるか共通点を見つけたり既にそうした国際組織ができていて それをテーマとしているところが多く考えさせられました。 そのためには語学をものにして インターナショナルな物の見方をつけなければならず大変ですが、もし同じメンバーでワークショップを持つ機会があれば 次回はもっとよくなりそうに思うのですがいかがでしょうか。

今回も英語力の不足を補う細かい配慮 パンフレット、報告集、折り鶴、ビデオ、教室のレイアウトなど 少なくとも私が参加したワークショップの中では最もいきとどいていたと思うのは我田引水でしょうか。

(放送映画制作者)

6 段とびの英語によるワークショップ

正路怜子

12日間の旅も A I 3 0 8 便が大阪につけば無事終了。前宣伝だけ盛んだった「国際婦人年北区の会」の10年をしめくくる修学旅行として、はたして成功だったのかどうか・・・

1) 私たちのワークショップ

7月15日 2時～3時半は「日本の働く女性の労働条件」というテーマ。へやの片すみではく映像'85一女の気持ち、雇用均等法を考える>>というビデオを上映、真ん中ではへたくそな英語をよみあげてのスピーチ、壁にはグラフや写真やポスターをはりめぐらし、入り口にはのぼりをたててよびこみ、資料<WORKING WOMEN IN JAPAN>や折り紙やバッヂを手わたす。参加者は100人をこえ、質問も“売春”“保育”“労組”“政党”私たちの運動への連帯の声など、インド、フィリピン、アメリカ、中南米など友好的かつ活気にあふれ 語学の壁にはばまれたもののまづまづの成果。通訳の大塚野百合先生から「もっとアピールするための演出が必要よ。みんなの英語力からいったら6段とびね」とひやかされました。

2) フォーラムをうろついて

1000の分科会、12000をこえる人、近いうちに次はアジアでと毎日発行された新聞にかいていましたが、ケニアでやっただけに黒い人たちが目立ち、アジア人は少なかった。やたらに日本人は目についたが、韓国などは20人とか。コペンのときには2～3のワークショップしかもたなかった日本人が60余りのワークショップをもったそうだから、たとえ自治体の目玉行政として参加したにしても、これからがたのしみ。各ワークショップは活気のあるあふれるのや10人ぐらいのやキャンセルや様々だがそれなりにたのしかった。

広場やピーステントはいつも人でいっぱい。物見遊山のおんなのおまつり、世界中のいろんな人たちと会っただけでよかったと思うことにしよう。

3) インド(ボンベイ)、ケニア、キリマンジャロの麓など、旅行としてもバラエティにとみ、勤続20年目の自分へのプレゼントとしてもまづまづでした。(編集者)



待つこと2時間、こないバスに踊りがはじまった。・

「愛と平和は成熟のあらわれ 食欲と憎悪は未熟のしるし」

—わたしはナイロビで少しは成熟したか—

森井久美子



十年間かけた私たちの目的の分科会です。英語にお強いようで英訳となると知人も全て手におえないとおっしゃり、とうとうご紹介でプロの方に急拠格安でお願いしました。と
はいうもののグループの中で数少ない発言者に任命された責任は重大なのに、とにかく書いてある文を読むことすらできへんのです。よみ方を辞書ひく余裕もあれへんで英訳原稿をご夫妻から受けとって、やっとこせ印刷だけしてバッグにつっこんで機上の人となつたのでありますが、ご夫妻まで「働く現場からの借り物でない主張には心をうたれる」など
と下さって頑張つてこいと出されたので大変です。



「雇用って売春か つらいわあ」

飛行機の中で金谷さんの特訓を受け、区切りと発音と強調とサインペンでセッセ。セッセとぬりたくって、最後の土壇場ナイロビ大学の広場にいやというほどいではる金髪に教えてもらたら一番確実やないか。金髪つかまえて「どこの国からきはったん！」勿論これ位は私だって英語できているんですぞ。「スウェーデン」まんわるい。スウェーデンで英語しゃべる国やったかしら。ままよ。「PLEASE TEACH ME」するとなんと、お世辞でも「YOU ARE GOOD!」とってくれたではありませんか。勇氣凜々分科会にのぞんだのであります。何しろ十日間で千回ほどある分科会ですから、みんなで呼びこみも一生懸命やって、満杯のお客はお迎えしたのですが、三分の二が黒人。

日本型マネージメントと日本のマスコミでもてはやされてるのに、なんで共通の土台にある先進資本主義国の婦人がけえへんのやろ。世界の中の日本の位置について考えさせら

れた。私たちの分科会のテーマは「日本の女性の雇用状態」なのだけれど特に東南アジアでは就労する生存するということが売春であること、その有力な雇主が日本人であることを書物の上だけでなくその国の人の顔つきと見振りで言葉で思い知らされたのです。インドのハンサムな産婦人科医の少女売春撲滅ボランティア活動にも心が痛むやら頭が下がるやら。雇用の次元の違う現実もふまえて私たちの分科会は超満員で終了。

グループのそれぞれも分担を無事果たしたし、私も翻訳者の顔はチラつくはカンパくれた人の顔はチラつくは、奮闘して、お互いまずは九十八点と総括できたのです。

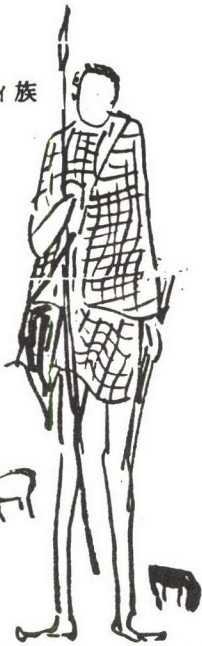
重い宿題「成熟」

たくさんの国の人とまじりあって時をすごし、自由時間を持って帰国した。なんて愉快なんやろ。職場にかえると明瞭に理由がわかる。「あっ！ 鉄鎖いがいに失うものは何もない。資本の鎖から、つかの間でも離れてる者同志やった。」帰ると早々、会社から均等法をさらに悪用した能力差とみせた職種の男女別分離と賃下げの方向の制度が提案された。又、又、また……。

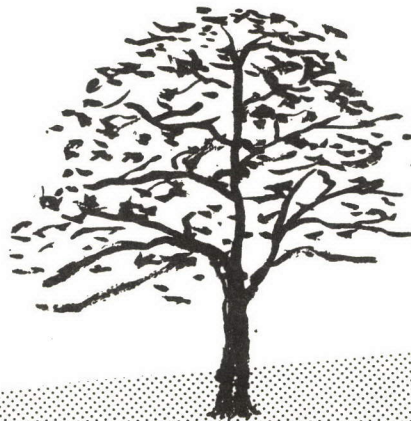
「母なる大地は、そのようには人間をつくらなかったはずだ。」「食欲と憎悪は未熟のあらわれ。愛と平和は成熟をあらわします。」核問題で取材していたテレビのアメリカの一市民の言葉だ。ナイロビでわたしは少しは成熟しただろうか。（日本生命社員）

(カットは森井久美子)

誇り高きマサイ族



「片足がちょうのエルフ」
の あの木がいっぱい。



この原稿は、もとは9000字に及ぶものなのですが、やむなく2頁に縮小しました。別の機会に是非全編をおよみください。

「ナイロビ・フォーラムと アメリカ黒人女性の立場」

風呂本 惇子

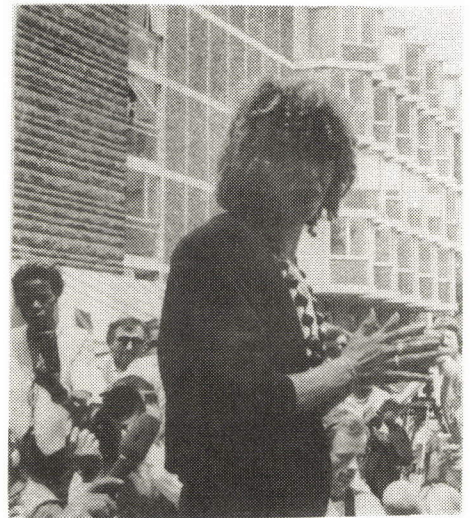
アメリカ黒人女性の殆どは、初めて見る先祖の地、そこで出会う同じ黒い肌の女性達との交流に、わくわくするような期待を抱いてナイロビへやって来たことだろう。公民権運動の闘志アンジェラ・デービスの「アフリカ大陸に来た時に生じる自分達の変容を体験したかった」という言葉は、彼女達のそうした気持ちを代弁したものとも言える。アメリカ黒人文学を専攻する私自身にもフォーラム参加の動機の一つに、そのような「出会い」の場に立ち会えるという全く個人的な関心があったことは否定できない。

ところが、私の出席した幾つかのワークショップで、アフリカの女性達はアメリカの黒人女性に「同胞」「姉妹」としてよりは「アメリカ人」として対していた。アメリカの企業や軍隊はアフリカやカリブの黒人達の生活を圧迫し、アメリカの文化も彼等の伝統を追いやって行く。これに対する反発が、たとえ黒人女性であろうとも「アメリカ人」である彼女たちを単純には受け入れ得ない状況を産みだしていたようである。偶然、親しく語り合う機会を得たアメリカ人黒人作家アレクシス・デポーは「アメリカ人であることの恥辱」と言う言葉まで使っていた。だからこそ、七月十七日にデポーを含むアメリカ・カリブ・アフリカの黒人詩人達の詩朗読会がピース・テント内で開かれた時には、国境を越えた「黒い姉妹達」の連帯意識が一層感動を呼び、意義深いものに思われた。

ナイロビ市街を離れて一步農村へ入ればすぐにわかることだが、大多数の貧しいケニア女性にとって、「婦人年」も「会議」も無縁なのだ。NGOに出席できるアフリカ女性はいわばエリートなのである。そのエリート・アフリカ女性の批判を受けるアメリカ黒人女性は、白人男性優位のアメリカ社会にあっては政策決定に最も非力な立場に居る。

こうした構図を考える時、NGOに参加したアメリカ黒人女性の殆どは、多難な前途にたじろぐ思いを抱いたことだろう。でも、アンジェラ・デービスは「大勢の姉妹達が自分達よりもっと酷い状況にあることをまず認識しなければならない。」と率直に語って一つの「変容」を示した。この「変容」が基となって、遅々としたものであっても、歴史の中の何かが動いて行くことを期待したい。

(大学教員)



ANGELA DAVIS

「これは Family planning ではなく、まさに population control だ。」黒人女性への白人医師の不当な処置に対して語気を荒げて語る南アフリカの女性の言葉を聞いた時、私は思わずハッとした。妊娠した女性本人の意思とは関わりなしにほどこされる中絶の処置——彼女達にとってはまさに population control なのだ。

南アフリカからのパネラー達の、アパルトヘイトに対する抗議の言葉が次々に発せられた。「私達女性には教育が必要だ。教育を受けることにより意識の変革がなされなければならない。」 U.S.A. からの女性が手をあげ発言を求めた。「これは何も南アフリカだけの問題ではない。U.S.A. の黒人女性とも連帯し、双方から運動を進めねばならない。そのためには女性のためのワールド・センターの設立を！」の力強いアピールがあり、署名を求める声が上がった。

ナイロビ大学の中庭に建てられたピース・テントにはいつの間にか私の後に幾重もの人垣ができていた。私は第三世界の女性達の眼ぞめつつある力強いパワーを感じていた。私はこの女性達の動向を、エネルギーを、どのように女子大生の教育の場に取り込めばよいだろうか。

モウモウと砂ぼこりのあがる、しかしその砂ぼこりの中でしたたかに息づいているアフリカから帰って、私は今、自分の方向を模索している。
(大学教員)



カット 後藤

— 口 感 想

神谷伸子

北区の会の修学旅行・・・広いところでのんびりしたい、というのが私の最初の参加動機でした。国際会議は英語ができないとダメと聞いてからも、世界中の女たちの集まりを見るだけでもいいもん、と割り切って参加。

ところが、日程はあまりにあわただしく、また、話せないことの辛さを思う存分味わった12日間でした。でも私が参加したことで、周りの人たちがナイロビ会議に関心をもってくれたことは思わぬ成果でした。

NGOフォーラムは混沌としかいいようがなく、全容は誰にも分からないでしょうが、誰でも参加でき、誰とでも交流できるという意味では、(言葉の障害さえなければ)貴重な場だと思いました。

日本だけを見ていると暗くなりがちですが、国際的な視野を常に持ってこれからも運動を続けていこうと、思います。
(図書館司書)

激しい雷雨に迎えられた私たちのナイロビは、数々の思い出や貴重な体験をつくってくれた。草の根運動の10年の総仕上げとしてNGOフォーラム参加を私たちが意識するようになってから、グラフや資料づくり、レポートの作成とまたたくまに日過ぎていった。

枝ののびた大きな木や赤茶色の建物が見える私たちの5日間の宿ナイロビ大学の寮で、あるいは広くて美しいフォーラムセンターや小さな村や学校で、数しれないケニア人や世界の婦人との出会いで、世界会議に参加した喜びと実感をかみしめケニアの空気を胸いっぱい吸い込んだ。

私たちのワークショップには手づくりの汗がにじみ出ていたが予想を超える第三世界のパワーや自己主張の前に、存在が小さくなった感じがしないでもない。たしかに、この日のために準備や打ち合わせは重ねたが、発表方法や運営が日本的視点に終わってなかったか、物見客の気持ちが少なくとも潜在的にはあったのではと、反省させられる点は多々ある。でもここでの経験は、日本では不可能であろう。第三世界の熱い思いや叫びがいまも胸にひびいてくる。これからは世界の婦人を視野に入れてなくてはならないだろう。技術教育のフォーラムでインドの婦人とオランダの婦人が連帯の握手をした姿が印象的だ。日本も国際的な場で堂々と演説をする日ももうそこにあるような気がする。

(国家公務員 職業安定所勤務)

アフリカでやったのは正解だ

渡辺和恵

語学力ゼロのためNGOフォーラムは中味の議論がわからず全く残念。しかし、「平等・発展・平和」の願いをこめて、世界の女性達がこんなにも集ったかと感動。特に黒人女性の多数の参加、しかも堂々した発言に感服した。参加前に種々の情報(ナイロビは一人は受け入れ出来ず、宿泊の保障はない等)をうける中で、ヨーロッパででもすれば良いのにと思っていたが、やはりアフリカでやったのは正解であった。

ところで、「平等・発展・平和」の共通の敵は何なのか。

アフリカ・アジアの問題が自分達日本人とどうつながっているのか。これらが明確になったところで世界の女性の連帯の心の結集と行動が生まれるが、この点についてはどうだったのだろう。NGOがこの集まりのまとめを早急にすること、それについては我々の集まりからも情報収集するよう申し入れるべきだと思う。

その他に、インド・ケニアへの旅は差別の重み(搾取の機構と人間の生き方)をあらためて考える良い機会であった。

(弁護士)

“FORUM 85” を読んで

岡 英 子

“FORUM 85”はタブロイド版の8～12頁の新聞で、ノールウェイ、ケニヤ、イギリス、アメリカ、ネパール等の国際的なチームのジャーナリストによって編集されている。NGOフォーラムおよび政府間会議の期間中、土、日曜日を除いて毎日発行され、参加者に無料で配布された。(但し、NGOフォーラム最終日、7月19日までしか入手していない)



最初の号(7月10日)では、NGOフォーラム組織委員長ニタ・バロウ(バルバドス出身)が「対決を避け、一方的に話すだけでなく耳を傾ける雰囲気を作り出そう」と呼びかけている。また、ケニヤのモイ大統領はメッセージを寄せて、参加者が発展途上国の田舎に住む女性に特別の関心を払うように希望している。この二つの事柄、「対決を避けること」「発展途上国の女性に関心を払うこと」は今回のNGOフォーラムの大きな特徴のようである。

過去二回のメキシコ、コペンハーゲンでの会議の対決姿勢を乗り越えて、各国の政治状況に左右されることなく連帯していこうということが、繰り返して述べられている。編集者のコラムでも主張されている他、ベティ・フリーダもインタビューの中で、「世界中の女性が一堂に会する唯一の場所であるフォーラムに、私はネットワーク作りのために来た。政治的な事柄で分裂してはいけない。」と述べている。

発展途上国の女性、中でも田舎に住む女性のことに関しては、アフリカの女性がどのような状況に置かれているか16日の紙面で一頁を割いている。それによると、アフリカの農業は女性によって支えられている。というのは男性は現金が得られる他の産業や、機械化された輸出向けの換金作物栽培に従事しているからである。その背景には機械を扱うというような訓練を必要とする分野ではある一定の教育が要求されるが、女性は依然として男性より教育を受ける機会が少なく、文盲率も高いので他の分野に従事できないということがある。この輸出向け作物栽培は広大な土地を要求するので、女性は年々不毛な土地に追いやられ、生産性がますます低くなっている。それに加えて、水や燃料を確保することが女性の労働のかなりの部分を占めているので、いかに女性が激しく働かなければならないか想像に難くない。

(女性の平均寿命は50才)燃料とは大部分樹木であって、土地の砂漠化に一層拍車をかけている。編集者のコラムでも「発展途上国の女性の3/4は田舎に住んでいて悲惨な状況にある。この状況を無視しては、平等、発展、平和のテーマも空しい。世界に向かってこの問題を訴えよう」と呼びかけている。

15日の紙面では、フィリピンのシスターが第三世界の売春問題について語っている。このシスター・ソルは女性に対する搾取に反対する第三世界の運動の組織者として、世界的にも良く名前を知られている人だということである。日本人として注意すべきことは、この運

動が1980年にマニラの日本大使館に抗議の手紙を送ることをきっかけに始まったということである。特に日本の男性と企業のことが強調されていて、日本男性の買春は企業による“報奨”の一部という面があると述べている。日本の女性としてこの運動を支援する責任を痛感するが、具体的にどうしたら良いのか今後の重い課題である。

記事として取り上げている分科会の数は限られているが、第三世界の女性のことを扱ったものがやはり目立つ。もう一つの特徴は国際的な協力のもとに運営されている分科会が多いということである。これは日本の各グループの分科会が国際的な協力はおろか、国内での協力もなくバラバラに開かれたこと際立った対照をなしている。世界の女性のネットワーク作りは相当進んでいて、日本の女性だけが(少数の個人を除いて)その輪にまだ入っていないという印象を受ける。これらのことはフォーラムのプログラムも見ても同様の傾向なので実情を反映していると思われる。但し、実際に開かれた分科会の数は1,000以上もあるので、「どういう分科会が開かれたのか要約を載せてほしい」という投書に対して、“FORUM 85”が全てをカバーすることはできないと答えている。分科会の主催者に対して、活動報告をNGOフォーラム組織委員会に送ってほしいという要請がなされているが、フォーラム全体としての報告、結論、勧告などは出されないということである。

また平和についても、長年平和運動をしている人へのインタビュー、分科会の紹介、ピース・テントについて、イラン、イラク両国の女性からのそれぞれのアピール等、かなりの紙面が割かれている。ピース・テントとは平和に関する様々な催しを行うために設営されたテントのことで、15カ国、40人の自発的なスタッフによって運営された。アメリカとソ連の女性の対話もここで行われ、平和の為のデモを両国で今秋同じ日(9月のいずれかの土曜日)に行うことが合意された。

その他には、16日のコラムではナイロビ以後は?という問いかけで、2000年までに今後共5年に1回フォーラムを開くべきだと主張している。17日にはフォーラム参加者の声も特集していて、ほぼ全員が熱心に賛成している。また19日には、家事労働その他の支

払われない労働の経済的貢献を認め、GNPに反映させよというキャンペーンがフォーラム初日から行われ、何千人もの女性および何人かの男性が署名したということが報じられている。このキャンペーンはイギリス、西ドイツ、アメリカ、カナダ、アルゼンチン等各国で行われているということである。

以上、ざっと一通り、英語で書かれている部分のみ読んでみての大雑把な印象であるが、時間とスペースの関係でお許し願いたいと思う。

← “FORUM 85”の紙面から



July 10

80年 夏コペンハーゲンの街で会った黒い女性たちは、威厳に満ちて威風堂々という感じだった。そのときも次は「BLACK.の時代なのだ!」と思った。しかし、コペンで目を奪われたのは、女性たちの討論の外円で赤ん坊の世話をしている NEW FATHER たちの献身的な姿だった。乳母車の押し手はきまって男だった。「差別撤廃条約」が息づいていた。

今回、出発の際「アフリカへ行く」というと 近所のほとんどの人は「ボランティアですか」とか「井戸掘りにですか」とか、という質問をされて、やはり“アフリカの飢餓”は関心が高かった。ナイロビに到着してからも、飢餓のアフリカと陽気なエネルギーなフォーラムのアフリカ女性とは 私の中でなかなか結びつかなかった。

スケジュールが混んでくるにつれて、結びつきにはもう関心が薄くなって、「楽しけりゃいいさ」とアフリカの生命力に引きつけられて、歌ったり、踊ったり、叫んだり、大笑いしたり、なりふりかまわぬ破壊英語力を発揮したりの生命の洗濯で、こころの(!)ぜい肉のシェイプ・アップができた。

そしてU.N.会議で2000年までの継続が決定され ホットとして、コペンよりナイロビへ、そして2000年への女性たちの流れを考えようとするとき、またもや飢餓とフォーラムでの踊りと歌(赤土のような女性たちの声のすばらしかったこと!)との関連づけに迫られることになった。

南北問題、東西問題、民族人種差別など過激になりそうな問題は極力さけた組織委員会の方針で フォーラムは「女のお祭り」となったが、やっぱり そのことに目を向けることによりはじめて女性差別が見えてくるのだと思う。

南北問題——南の資源をくいつぶし(森林、食料品。)、地球の南を滅ぼし(砂漠化)、南の子どもたちを殺りくし(餓死)、南の女性たちの性を商品化し、その上に我々北の不安定な繁栄が成り立っているのだとしたら、やっぱりこれほどの不平等はないだろう。この不平等への闘いは、安易な男性との敵対からでもなければ、協同からでもないようだ。男も女も生命を深く理解することから「婦人の2000年」が出発するのだろう。(婦人問題研究家)

○ FORUM85. 7月18日号にインタビューを受けた後の顔写真がでた。日本人の数少ない登場者として、縮小したのをここへ載せました。



Chieko Kanatani of Japan.

FORUM 85 photographer **Stephenie Hollyman** has probably seen more of the Forum than anyone else. This is how things looked through her viewfinder.

GNP第3位を誇る日本経済の繁栄のおかげで、働く婦人の健康破壊の状況を知らせ、ついで海外の医療実態も知りたいというのが、NGOフォーラムに参加する私の口実だったが、実際はレポートの英訳も校正も印刷までも他人まかせで主体的にかかわってこなかった。ツケは必ずあとでまわってくるものである。

インドに立ち寄った際、らん褌という言葉がびったりの街の状況に衝撃を受け、私の持っていた健康の概念や看護観が全く役に立たなくなったような不安を感じた。

W. H. Oでは「健康とは、ただ疾病や障害がないだけでなく身体的、精神的ならびに社会的に完全に快適な状態である。

到達しうる健康の最高水準を享受することは人種、宗教、政治的信条、経済的あるいは社会的条件にかかわらず人間の基本的権利のひとつである。」と定義している。が「社会的に完全な快適な状態か」が「社会的に役割がはたせる」であり、「社会人として役割がはたせるかどうか」というように健康が個人の努力へとすりかえられている日本の現状である。カースト制度が今なお存在し、物乞いを職業のように身につけている子ども達をみると健康とは決して個人の努力のみで得られるものではなく政治的、社会的、経済的な面から獲得しなければならないことは明らかである。

フォーラムで会ったある紡績工場の女子労働者の教育をしているインドの婦人は、インドでは日本の女工哀史そのまま結核が非常に多いことを話していた。

ベトナムの婦人はシャム双生児の写真を示しながら、アメリカの枯れ葉作戦の影響でこのような不幸な子どもが彼女の勤めている病院にもいること、平和でしか健康がまもれないことを激しい口調で訴えていた。帰国してベトナムの医学が国の方針として予防医学を第一としていることを知った。彼女の言葉もさこそうなずける。もっとも早く調べておくんだった。正につけはあとでまわってくるのである。

大学の外の展示即売店で「ミルクをやめ母乳を飲みましょう」というポスターが目についた。通訳してもらって、ケニアでもアメリカミルクが大量に輸入され、母乳を飲ませない母親が増えているということだった。

我が国では悪性新生物がトップを占め、ついで循環器系の病気を始めとする成人病が増えている。子どもの交通事故死も上位をしめ、繁栄のおかげで健康がゆがめられているのは確かである。ケニアでも婦人パワーはすばらしく、国立病院は無料だが遠いこと数が少ないこと、地方の医療は勿論有料で病気になると牛一頭売るという話も聞いた。一方、百余人のフォーラム参加者を招待するインド人大富豪もいる国である。形はかわっても各国を支えている大多数の働く人々の健康は国の施策と深いかわりをもっているのは事実である。健康への道は「社会的に良好な状態」を獲得するという能動的な方向にむかわなければならない。と思う。

(看護婦)

7月13日 ナイロビ近郊カンブイ地方へのバス旅行に参加。外国人経営のプランテーションに支配されている農業を改革するため、政府によって各地に農業共同体がつくられ小作農が育成されていて、そのうちのモデル共同体の視察であった。婦人たちが井戸を掘って生活改善を推進している例、200人の婦人で2000羽の養鶏プロジェクトを実施している例、手芸品によって収入を得ている共同体、婦人ギルド共同体等を訪問した。

これらの農家の主要栽培作物は コーヒーとトウモロコシであったが、プランテーションの整然としたコーヒー園に比べ 一見して栽培技術に遅れがみられたし、また養鶏にしても 飼料会社からの購入飼料による多頭羽飼育プロジェクトが、上部から強引に推進されていた。しかし、自給飼料に立脚しない養鶏経営の将来には大きな不安が感じられた。

コーヒーの流通を 外国資本に完全に握られている現状とも考え合わせると、ケニアの農業の将来の多難さが思いやられた。

女子高等学校2校と ろう学校も訪問し、女子高校生の歓迎の歌と踊りに圧倒され、地元婦人の手づくり料理を供され楽しい一日だった。 (農業生活改良普及員)

..... まあ、こんなこといわはる —

メンバーは、ウィットとユーモアにとんだ実に楽しい人達でした。

「行く地獄、残るも地獄ですなァ」 — どの見学バスにのっていいやら 全く見当がつかず 不安におののいている大学正面の 私達の群れに対して (本多先生)

「パンティの色は7色でなく6色でいいわ、1日はノーパンティよ」 — ナイロビ大学の寮のカラフルな洗濯ものを見上げて (石田さん)

「Mt. チリメンジャコ」 — キリマンジャロのふもとの小高い丘を見上げて (後藤さん)

「人生とは待つことである。しかし(と云ったかどうか)、待つことは人生でない。」 — ケニア空港で長い時間をもてあましイライラしながら (大塚先生)

ケニアの砂漠も単調で、シマウマもゾウもその内にあきてしまいます。やはり人間の中で、こんな楽しい人達と共にあってこそ、と思いました。

..... (小林明美).....

言葉も判らず大金かけて 今 なぜケニアなの？ 友人は笑った。

昨年の夏休みもケニアに行くためにとらず、国際婦人年最終年に全てをかけた。33年余働き続け、定年を1年余残して、今、私の人生の記念碑にしようとおもっている。(大げさですが交通事故で主人を失って24年、昨秋娘を嫁がせ“翔ばされた女”もそろそろ羽を閉じる時が来たかと思っていましたので)

12日間の休暇をとるために、決められた仕事は全部済ませ、他の人に迷惑をかけぬよう、スケジュールをこなすのに精一杯。Tシャツのマーク染めも日曜の一日で染め、女性の顔を染め上げたのは出発3日前。急いだため今一つのできだったけれども北区の会に参加する姿勢だけは持ちたかった。出発直前に染色講師の試験を受けた。飛行機に乗った時、忙しい仕事のことも全て忘れ ホットした。

が、ボンベイに着いた異国の夜、物乞いの女性、たむろする男性たちを見て、これからの旅の厳しさが思われ、私の気持ちの甘さがふっとんだ。そしてケニア、ナイロビ。

平和のテントでの広島・長崎デーで平和を訴える他国人の姿。原爆許すまじ、明日への伝言を歌った感激は忘れられない。ワークショップ、NGOフォーラム。大学構内で見かけた多くの第3世界の国々の女性の堂々とした姿、発言に感銘を受けた。

地続きの国境を持つ国々に住む人たちの平和への願い、人種差別を受ける国の女性、二重の差別の苦痛、私が会社で受けた差別とは異なり、深刻さが伝わってくる。国境が海でへだてられた日本は“なんて平和で幸せな国”であるかと改めて感じた。飢えの国の窮状を聞くたびに戦後の日本、私のこどもの頃の貧しきが見せつけられる思いで身につまされた。美しいキリマンジャロ、保護された動物たち、いつまでも美しく幸せであってほしい。そして恵まれぬ南の人々のために何かをしなければならぬとこの旅に参加して強く思ったものです。
(毎日新聞社員)

アフリカの婦人と私

田丸青実

インドの空の夕焼けを見ていると、アフリカがなつかしく思いだされてくる。その強烈なオレンジに比べて、雲間に現れたキリマンジャロの薄青い色と雪はなつかしい景色だ。サファリに群れている動物のじっと動かぬ姿も又、思い出の中で、くっきりとたたずんでいる。キリン、象、しま馬、チータ、ライオン、水牛、ジャッカルの、ヌー、鹿、そして猿と小鳥、サファリの中に生きているそれらの動物がインドの空に次々と現れてくるのだ。そして消えてしまうのだった。強烈な印象に較べて、世界婦人会議のNGOは靴の上から足をかくようなもどかしさが残るのみだった。英語圏の婦人たちの早口をききとれる程、

トレーニングを積んでいない英語力ではいかんともしがたい。出たのはアパートヘイト、ブラックウーマンの連帯、平等法等興味あるテーマを追っていたが、世界の婦人が自分と同じテーマを同じように論じているのをきいて、「我が仕事人生20年」は今ここに集約されたと思った。だが、我が人生はもう終わりに近い。これからは世界の婦人のために、何か出来ることがあればやってみようと思う。アフリカの婦人たちが、足もとをみつめて、一步一步前へ進んでいっているのを見るのは 嬉しいものだった。彼女らにまけぬよう、「強くたくましく生きること」これが、アフリカへいった私の唯一の結論である。

(ラジオ大阪局員)

番号だけの参加章

片岡陽子

フォーラム参加二日目の朝 チェンジに時間をとられたくない、ほとんど真っ先に並んだのが九時二十分前。私の前にはアメリカ女性がいる、彼女の横にはインド女性が窓口から見えない位置に待機している。チェンジは当然九時から始まると思っていたのに、始まったのは掃除。十時にやっとスタッフと現金などが到着。業務が緒についたのは十時二十分頃で、延々と待っていた。寒い朝だったし 石だたみは底冷えがしてくる。もちろん行列のみんなはしびれを切らし、窓ガラスをどんだんたたいたりもしたが効なし。

その中でインド女性はチェンジしないのに、アメリカ女性と話すばかりで分科会の時間がきても立ち去らないのがふしぎだった。やっと窓口があると アメリカ女性は、現金と小切手の両方を換金。

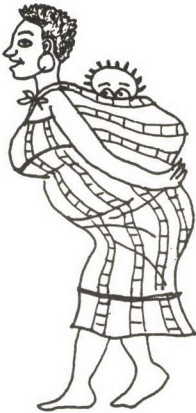
それを別々に支払わせたい率などをしつこくきいている。それで彼女がインド女性のために現金を、自分のために小切手を換金したのだとわかった。

インド女性の胸のフォーラム参加章が“25X”と番号だけである意味も、彼女がどんなに長く待たされても立ち去らない理由も分かったのである。

彼女は、パスポートがないから自分では換金できないのだ。そういえば 番号だけの参加章は他にも見かけた。森井さんなら絶対わけを聞くだらうが、私は想像をめぐらすだけだった。最終日の分科会の一つでガテマラとハイチの女性が南米での闘争への支援を訴えているのを聞いた。

海外へ出られる自由市民がそういう自由を享受できる国はまだ少数なのだろう。

(主婦)



カット 後藤安子

NGO本部の準備してくれた農村へのトリップに参加。様々なワークショップ、ピーステント、そして又自分の足で歩きまわりその地の人々の息づかい、声、匂い、街の空気を肌で感じた日々、あっという間の一週間、ナイロビのアフリカの何十分の一かにふれたのだろうか。

農村又は街で会った人々からは日本では感じられない程のフレンドシップを、そしてフォーラム参加のアフリカ諸国の女性からは独立後間もない若い国の強さと誇りと、そしてひたむきな情熱とを。まさに発展途上にある国の彼女らのすばらしいパワーに圧倒されっぱなしだったのは私だけではないだろう。

ひるがえって、今なお私の心を重くしている事実にもふれておきたい。それはナイロビ市郊外を北→西→南→東→北へと一周した時の事だが、簡単に言ってしまえば黒人居住区と白人居住区が完全に分離されていただけのことである。ただし、一歩中に踏み入ってしまうとそのあまりのコントラストに、一種の戦りつと共に、初めて植民地主義とはこういうものだったのかと、理解しえたような気がした。

赤茶けた土、土、アフリカのあの赤土。同色の家々、家路へといそぐ路上の沢山の黒人達（殆ど全員が町から歩いて帰るのである）。NGO本部の用意してくれた緑豊かな農村へのトリップからは想像もできない別世界。どうしても、どう考えても上手に説明できそうにないのが残念だけれども、しばらくはうまくだまされていたのだとの思いで一杯でした。ケニヤの前途は多難と思いつつも、現政権に期待したい。但し、近代化をいそぐあまりに、新しい差別を（フォーラム参加のエリート女性と黒人居住区に住む労働者たち）どんどん産みだしているのではないかという問題に対処しつつ。

真の自由と独立に向けて！！

（薬剤師）

もっと時間が欲しかった

野田節子

“もっと時間が欲しかった”というのが私の一番の感想と思う。遊びたい。フォーラムにももっとたくさん出たい。世界中のフェミニスト達と知り合いたいと、まあ随分欲張った希望で、達成率は20～30%という所であろうか。ま、遊びの方はかなりしたが、その他本来の目的の達成率は非常に低かったといわねばならない。それはまず私が怠けていた事が大きな原因ではあるけれど時間が少なすぎたこと。語学力の圧倒的な壁、万里の長城のような壁が前に立ちはだかっていたことも大きい。

ナイロビ大学でわたしが感じた事

アフリカの女達の体中から発散するものすごい迫力。まるでブルトローザーか何かのよう

なたくましき。アラブの女達の黒いチャドルの下の目の異様な魅力。彼女達は日本人である我々のように誰でも（私でも）行ける国からきたのではなくて各国選り抜きのエリートであるに違いない。そのほこりと自信が一層彼女たちを際立たせているのであろう。日頃みる日本の女達のあまりの迫力のなさと、その原因とも言える日本社会の現状（豊かさと因習）をかえってまのあたり突き付けられる思いがした。しかし、反対に、日頃半分あきらめの気持ちを抱きつつ現状を変えていかねばと思っている私にとっては、又、彼女達のきらめく表情があきらめてはいけない希望にも見えた。女が本当の自分自身を表現する事ができる世界を、という私自身の“希望”と“勇氣”それが今回の旅行の収穫かも知れない。

（システムエンジニア）

フォーラムへ男も女も！

山田初美

ケニアで開催されたNGOのフォーラムに幸運にも参加することができ、ただ受身であった過去、自分らしさを求めて生きてゆくことを決心した現在、そして常識や社会通念に翻弄されることなく積極的に生活していきたい未来、そんな自分の構想とこの旅行を通じて出合ったすばらしい人たち、そして語りかけてくれるものの中から、その真髓を、自分自身との心の対話をこれからの糧にしてゆきたいとつよく感じました。

ナイロビ大学の構内に設けられたピーステントに参加し、反核の歌声とともに、戦争のまっただ中にあるイラン・イラクの人たちの平和を望む訴え。「NO MORE HIROSIMA, NO MORE NAGASAKI, NO MORE VETNAM」と行ったベトナムの女性。核実験がアフリカの海で行われ、弱者を常に武力で圧することへの怒りを涙ながらに訴えたケニアの女性。米国および日本がシンガポールの軍事力を誘引していることへの非難と、私たちに共に戦ってゆこうと力強く訴えたシンガポールの女性。男性社会が作り出した様々なひずみを女性が同じ時点で場所で共に問題提起し、考えてゆくためにも、あらゆる分野に女性が進出し、その地位の向上を求めなければならないことを力説していたアメリカの女性。彼女たちの肉声を通じて、一人でも多くの女性、男性がこういったフォーラムに参加できる機会を望まずにはいられませんでした。それは、言語の壁だけでなく、確実に全ての人の意識の扉を開けてくれるはずです。

WORKSHOPは「女性と育児」に関するものいくつかに参加し、これらに係わる問題点が話合われた時、いつも男性の存在がまるで第三者のように聞こえてくる言葉の中で、胎児を宿した時点から「男はあてにならない！」という自立心(?)に目覚めるという友達の言葉が交差し、女性のたくましきを感じる反面、真の男女平等、特性、そして役割を認識してゆかなければ、他の社会そして民俗、文化の存在を認識することは、むつかしいことだと感じずにはいられませんでした。

（国立大学事務職員）

世界の女性は自信に溢れて

岡 英子

帰国して、何が一番印象的だったかと人に問われて、私は「世界の女性の力強さに圧倒されました」と答えている。ナイロビに着いた翌日のピース・テント（平和に関する様々な催しが行われた）で、その日はたまたまヒロシマ、ナガサキ・デーだったのだが、色んな国の人達が次から次に順番待ちをして意見を述べるのには目を見張る思いがした。確かに日本人には語学的なハンデがある、でもその後に出席した分科会でも、流暢な英語を話す人ばかりではなかったのに、皆、堂々と自分の考えを述べていた。ナイロビに来られるほどの人達はその国でも指導的な人達なのだろうか、でも全部が全部そういう人達でもないし、若い人達も多かったのである。

そこに明確な意志の存在、自分の人生は自分で決めてきた人特有の自信に満ちた爽やかさを感じた。翻って、日本の女性を見ると、何か皆同じように見えてしまう人が多いのはなぜなのか、ひ弱な印象を与えるのはなぜなのか。それは、素直さが女らしさとして称揚される—自分の意志を出さないことが良いこと—という精神的風土と関係がある。しかし、自分の人生が自分で決められないで、人は自信を持つことができるだろうか。他人は他人、自分は自分という強さを持たないで、自分の価値が信じられるだろうか。自信が持てないと人は容易に傷つけられ、人間関係のトラブルも起こしやすい。そうして何か満たされない、爽やかさは程遠い人生を送ることになってしまう。

もうそろそろ日本の女性も自分の考えをはっきり持ち、それを明確に伝える時が来ているのではないか。このままでは、世界の女性に取残されてしまうという恐れを感じている。そうならないために、勉強し行動しようという熱い思いにつき動かされた、ナイロビの数日間だった。その思いを持続させなくては！

(図書館司書)

わたしを お嫁にやらないで
お父さん

ピカーネンへ行かせないで
お嫁に やらないで ね
お父さん

ピカーネンの 水運びは
ほんとうに つらい

水運びの 娘の足は
すりきれて 痛む

水運びの娘の足は
水運びの娘の頭は

すりきれて 砕けそう



Nita Barrow

詩： ニタ・バロウ (バルバドス出身)
1985 N G O フォーラム組織委員長

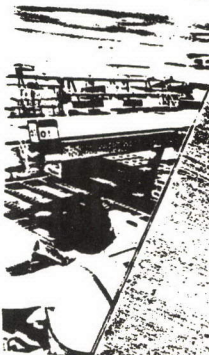
パンフ紹介

パートで働く

いったん「家事に専念します」と退職したら、今度はパートタイマーしか職がありません。賃金は正社員の半分、休暇も社会保険もないところが多く、せいぜい住宅ローンや教育費の不足を補う「家計補助」。これではいつまでたっても女の経済的自立はのぞけません。

Once a married woman gives in to the pressure to quit her job in order "to devote herself to housework," the only way she can find work is as a part-timer. Part-timers earn half the salary of a full-timer, can expect no paid holidays, sick leave or pension. Their tiny salaries go to help with the housing loan or children's education expenses. We cannot hope for "women's economic dependence" under these circumstances.

Working a



WORKING WOMEN IN JAPAN

OSAKA NORTH WARD INTERNATIONAL WOMEN'S YEAR STUDY GROUP (KOKUSAI FUJIN - NEN KITA - KU NO KAI)



働く日本女性の姿を伝えようと「北区の会」では資料のひとつとして「WORKING WOMEN IN JAPAN」を創りました。働く女性の姿を写真で紹介。英語と日本語で短い説明をつけた外国人の目にも日本人の目にも訴えるパンフレットです。ナイロビには約400冊持参。会場で配りましたが大好評。私も私もと手がのびてアツという間になりました。後からも「もうないのか」と問い合わせがくる程です。今、日本向けに若干余分があります。英語の勉強されている方。日本の女性問題を英語で説明しようとされている方、ナイロビで何をやってきたんだと思われる方、参考のためにいかがでしょうか。1部200円ご連絡下さい



Editors: Miyako Miura, Shizuko Koedo, Reiko Shoji
 Translators: Catherine Broderick, Junko Inada, Hikaru Hida
 Illustrations: Kiyoko Ishii
 Photographs: Yoshio Ishii, Ryuji Tada, Shigeru Kogami
 Published by:

© Osaka North Ward International Women's Year Study Group: Ms. Atsuko Kawanishi 404 Ueda Bldg, 4-10-6 Nishi Tenma Kita-Ku Osaka, Japan 530

女の問題は政治の問題

楠瀬佳子

連日のフォーラムでは世界中の女たちの意見が交わされ、私はその熱い渦の中にのまれていた。国籍や状況こそ違おうが、同根の苦闘と抑圧の枷を解き放とうとする女たちの熱い声に共感と連帯のメッセージが次々と加わっていく。女たちの状況、世界の動きを変えようとする確かな手ごたえがそこにあった。

フォーラム第一日目。ケニアNGO教育問題委員会主催のフォーラムに参加。過去10年間のケニアにおける教育の発展と進歩の実績、男女平等教育の理想、就学中の妊娠による落後者の対策等が語られた。性教育の責任者は誰かが論議の争点となる。しかし、フィジ代表からケニア代表に不満の声が上がった。つまりこの場にいるケニアのエリート女性の理想論を聞きに来たのではなく、女性に対する教育の歪みと抑圧の本質はなになのか、教育を奪われている農村に住む女性の本音の声を知りたいと。この会議で本音を語ることが最も困難だったのはおそらくケニアの女性だと誰もがきずいていた。農村ツアーでもお膳立てされた、調整された意見しか聞けなかったという。

立場や意見の違いからの対立を憂慮してか、大学のキャンパス内にも警官の姿が目につく。廊下をパトロールしたり、教室内に入ってきたりもする。この会議を手伝っていた学生の一人が、「この会議では誰も本音は語れませんよ。こう警官に監視されていては」と、私にひそかに語ってくれた。

あちこちの会場でも溢れんばかりの人々が真剣に意見交換をしている。私が主として参加したアパルトヘイト関係のフォーラムでは各国からの連帯のメッセージが寄せられアンチ・アパルトヘイト運動の体験交流が中心となったが、例えばパレスチナ代表女性からは自らの政治拘禁の体験が語られ、あらゆる差別と抑圧と非人道的行為を一掃しようとの訴えには涙と大きな拍手が沸き、それぞれが一層の決意を固めた。

エジプトの作家ナワル・エル・サアダウィはフリーダンと同席した集会でフリーダンが彼女に「政治問題は語らないでね」と言ったという。それに対して彼女は「私は政治問題と女性問題を切り離すことはできない。それに、私はあなたが何を喋るべきかなどなにも言っていないのに、どうしてあなたは私に喋るべき内容まで干渉するの」と言って、フリーダンの父権的態度を責めた。す

るとフリーダンは立ち上がって「南アフリカにおけるアパルトヘイトを終わらせよう」と突如発言したという。エルーサアダウィは、アラブの代表を排除しようともくられたNGOの会議にあらゆる困難を乗り越えて参加していた。コペンハーゲンの時と同じように街頭デモも計画していたが、ケニア政府によって禁止された。したがって、彼女は言う。「この次、女性会議を行なうとしたら、民主主義の国で行なうべきだ」と。

依然としてケニアの農村地帯では労働者・農民が一月500 - 600 シルで生活しているというのに、一泊700 - 1000シル以上ものホテルに泊まって警察権力に包囲されての会議中に、この国で裁判なしで政治拘禁されていた12人の空軍兵士が秘密裏に処刑されたという。私たちには知らされなかった。言論の自由と表現の手段を奪われている作家や知識人が政治拘禁や国外での亡命生活を余儀なくされていること等一切私たち参加者には知らさず、ケニア政府は「平和と安定と民主主義」のイメージ造りにやっきになっていたようだ。

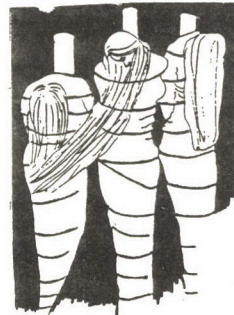
この会議中に南アフリカでも大変な事態が進行した。ベティ・フリーダンのようにアパルトヘイト反対を口で唱えるのはやさしいかもしれない。ナワル・エルーサアダウィが言うように「女の問題は政治の問題でもある」ことをはっきりと認識して、あらゆる不正義と闘う行動をいかに起こすかが最も緊急の課題であろう。私が参加したフォーラムの中には具体的なネットワーク作りが議論されたものもあった。多くの女たちと共にこれからも考えていきたい。

(大学教員)



Walter Castro/Folacha

Nawal el-Saadawi: "Women's problems are political."



絵葉書

イランの女性囚の釈放!

アフリカ旅行を終えて、また私は日常の中に舞戻ってきた。フォーラムに集っていた世界の女たちも、それぞれの国に戻り日々の生活を営んでいることだろう。

今から振り返れば、アフリカは遠い地の果て、海の果て。しかし、7/12～7/19 私は確かにアフリカの空気を呼吸し、土の上を歩き、いろいろな国の人たちと下手な英語で語りあっていた。ケニア、ナイジェリア、チュニジア、スペイン、オランダ、西ドイツ、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、デンマーク、アラビア、イラン、イラク、インド、フィリピン、韓国、カナダ、合衆国・・・普通なら一生かけても周りきれない数の国々の人と言葉を交した。一学生の私にとっては、世界はとてつもなく大きい。

でも、あの瞬間 私は世界の一端に手をふれることができた。垣間見ることができた。そのことがアフリカ旅行で得た第一の宝物です。

例えば、平等・発展・平和 この三つの言葉のつながりが、日本にいる間、私には余り実感できなかった。今の私には南北問題、東西問題が引き起こす不平等、貧困、戦争は決して他人事ではない。私たち日本人女性は被差別者であると同時に、日本社会に属しているが故に、差別者でもある。例えば、日本の価値観ですべてを判断してはいけないということ。異なった価値観とぶつかった時に、ちょっと待て、と自分の価値観を再検討してみると、絶対的だと思っていたものが日本という文化圏でしか通用しないものだったり、経済大国のおごりであったりする。

そういえば、ふと、言論の自由が許されない国の女性の中には、平等を叫んで母国に戻り、大変な目にあっている人もいるかもしれないと思う。

頑張りましょう。世界の女たち。反省点を山程かかえ、私も明日へと進みます。日々の暮らしを着実に21世紀へとつなげるために、一日一日を大切にしたい。

5年後に再会しましょう。

(学生)

簡条書き風感想

石田法子

1. 全体の雰囲気

インターナショナルな母親大会 又は大学祭

2. そこで考えたこと

色鮮やかな民俗衣装のすそをひるがえし、胸をはって歩き議論する女性たちがここで女達の問題を話し合っている間、各国の男達は何を考え何をしているのだろう。



FORUM 85 より

3. ワークショップの中味

英語力の乏しさ故、3. 4つのワークショップの中で議論の中味が理解できたのはわずか1つ。しかも3~4割程度。とても中味を紹介できるほどではないが、ただ育児と仕事の両立をどうしているか 各々自分の国の事情を語り合う姿に我が身と照らしあわせて、いずこも大変だなあとフンフンとうなずくばかりであった。

4. ケニヤ、インド

欧米を旅行するのと全くちがった体験をした。文化的にも現在の日本のそれとは全く異なっているし、各々の国の貧しさを自分の目でまのあたりに見、いろいろ考えることがあった。

5. 自分自身の収穫

旅行の最中である今は全くわからないがこれから先、いろんな場面でこの間のシーンが浮かんでくることと思う。 (弁護士)

外から見た日本

大塚 野百合

正路怜子さんからのお誘いによって、思いもかけずナイロビ会議に出席でき、北区の会の方々と知り合うことができたことをありがたく思っています。世界の舞台——史上はじめてといわれる女性の大集合に参加して、考えさせられたこと——それは、他の国々の女性の目にみえている日本の恥多き姿です。

土曜日ピース・テントで行われた「広島・長崎デー」の時、オランダの女性が、戦時インドネシアの日本軍収容所においてオランダ人が受けた虐待にふれた。つづいてフィリピンの人が、日本軍による残虐行為についてコメントをしました。月曜の15日 私たちのワークショップで、「日本における雇用の男女格差」のレポートのあとで、フィリピンのシスターが、日本人男性のセックス・ツアーにたいし、反対運動をしていると発言しました。朝日新聞に松居やより記者がこのことを詳しく書いているのを、帰国後よみました。

出発前の6月26日、恵泉女学園短大英文科で、彼女自身から東南アジアにおける売春について話をきいた直後に、この会議に出席したので、わたしの印象はいっそう強かったのです。

行きかえりにおとずれたボンベイのフォークランド・ストリートという所には、ネパールからつれてこられた10代の少女が、身を売っているというのです。

あの私たちのワークショップで、日本の売春について質問したインドの青年医師は、機内で知り合ったとき、黄色いパンフレットをわたしてくれました。インドの売春をなくすためのものです。いのちをかけて斗っているこの医師に頭が下がりました。(大学教員)

「世界中から女どもが集まって何やら会議をするらしい。うちの女房がそんなのに影響されたら大変。ナイロビの町に居ないように今のうちによそへ行かせよう。」

出発直前の新聞で、こんな記事が、ナイロビの話題として出ているのを読んだ。実際のところ、世界中から集まる1万人以上の女たちをケニアの男たちは、どんな思いで見ているのかと考えるのも面白い問題だ。

もの欲しげな表情で、垣根外から、ナイロビ大学のキャンパスをのぞいていた男たちの顔が浮かんでくる。原色の衣装をまとい堂々とした体軀で議論したり、笑いあったりしているケニアの女性たちに比べると、男たちの印象がうすいのは、彼らのスマートな体つきだけが原因でもなさそうだった。もちろん例外はある。大学キャンパスで出会ったジョナサン。大学の職員の彼に、私と松村さんは、はるか遠いチモロキャンパスまで案内してもらった。

彼はとってもハンサムで、スマート。私たちは、すぐ写真を撮ろうと一致して、パチリ。(一緒に写真を撮るかからないかは、重要な「判断基準」でありました。)

ケニアの女性は働き者だという。村には、水道はもちろん電気もない。朝の水くみにはじまり、農業労働をし、家事も子育てもこなす。それに対して男たちはどうだろう。シドニー・ポワチェのごとき知的な高級官僚のエリート男性たちやジョナサンのような若いハンサムを除けば、他の男たちはたいてい所在なげに見えた。満員のバスで帰るらしい工場労働者たちの疲れた様子。バスにも乗れない男たちがスタスタ歩いて家路に向かっていく後ろ姿。

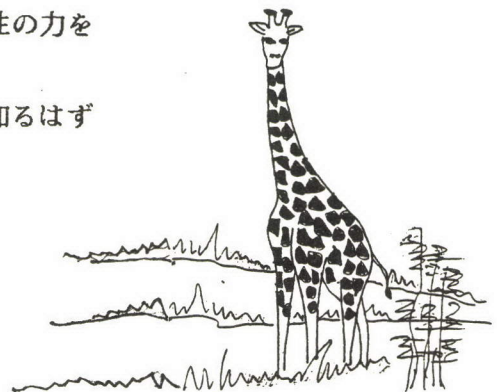
発展途上国の女性たちには、先進国の女性たちの課題とする男女の役割分担はあまり問題にならないときく。役割分担以前の問題が山積されているからだという。生活改善、保健衛生など、女、子ども、家庭の領域で女たちは頑張っている。そして、もちろん、生産労働の分野でも力を発揮する。これは、実は、男たちにも大いに結構なことなのではないかしら。

何もおそれることはない。

女たちにもっとがんばってもらえばよい。女性の力を借りることなく、社会や国家の発展もない。

アフリカの心ある男たちは、そのことをよく知るはずだ。少なくともわが国の男性よりはずっと。

(高校教員)



カット 後藤

北区の会ケニアツアー23人中のただひとりの男性としてNGOフォーラムに参加しました。参加者は全体として3000人という見込みだったが、12000人も参加者が出て、世界の女性解放運動の熱気がナイロビの国際会議場や大学にあふれているのを肌で感じとりました。女性解放は世界の平和に結びついていると判断していますので、是非ともこのエネルギーを発展させてもらいたい。国際婦人年を今年で終わらせないで今後とも継続してもらいたいという思いがつのります。

ただ日本人の国際性について、種々の面から考えなければならぬことを痛感しています。英語力の弱さもさることながら自分の訴えたいことを皆に訴えるための情熱、意欲、技術に欠けていることを反省しなければならぬと思います。はっきりと、“私はこう考える”ということをも単純明快に表現するトレーニングを積むべきです。それに日本のおかれている状況を国際的な視野に立ってみる眼を養わなければならないことを感じます。日本における男女差別といっても、第三世界の人たちからみればそれはどのように映っているのか、という視点がとくに重要です。とにかくこれからの意味での国際性を十分身につけることがわれわれの今後の運動の発展にとって緊急の課題だといえるでしょう。(大学教員)

添乗員をして

金森千鶴子

「北区の会」のことは、前々から知っていましたが、今度お伴することができ光栄でした。今となれば、ああも、こうもすればよかったと反省することばかりですが、何はともあれ全員が無事に元気で帰ってこれたことは何よりうれしいことです。

最初は「会」の方々は、そうそうたるメンバーばかりなので、恐れ多く大変心配でしたが、実際に中に入ってみると良い方ばかりで、普段の添乗と違ってやりがいのある仕事でした。私も今回は、何もかくす必要もなく、子どもがいることも、夫がいることも言えることは気が楽でした。私は共働きである以上、女性の出張も別に特別なこととは思いませんが、まだまだ今の日本では女が家をあけることには偏見があります。とても悪いことをしているように追及されることがあるので、普段はなるべくそういうことには触れないようにしています。ある時は独身だったり、又、ある時は子持ちの未亡人だったり、離婚女性だったりしておきますが、電話がかかってバレたこともありバツの悪い思いをしたこともあります。実際に、母親なり妻なりが家に居ないことは大変なことです。でも逆の場合だってやはり大変にはちがいありません。会議そのものには、仕事の関係で、皆さんのされたワークショップ以外出られませんでした。せっかく許可証をとっていただいたのに残念でした。これを機会に、皆さまの仲間入りをさせてもらい、いろいろ勉強し、良い仕事をしていこうと思っています。今後ともよろしくお願い致します。(添乗員)

資料



多少 意識的に資料をもち帰りました。(金谷・片岡・中居)
原文のまま書名、冊子名のみ掲載します。

◎ 持っていった資料

WORKING WOMEN IN JAPAN

(日本の働く女性はいま)
英・和併記 (P.21参照)

WORKING WOMEN IN JAPAN

ワークショップ用レポート集
英文

日本の女性の状態

(カード 36項目)
英・和併記 他

「Working Women in Japan」(英文資料)

あいさつ(序言)	川西 渥子
国際婦人年大阪北区の会の十年	正路 怜子
保険会社における女性の労働条件	森井久美子
民間放送会社における女性の労働条件改善 ..	寺本 真名
働く婦人と保育	金谷千穂子
これからの仕事と教育	米家佐奈恵
働く女性の健康	中居 成子
大学における女性職員の条件	小林 明美
大学女性研究者の状況	岡 英子
女性研究者が直面する二、三の問題	山田 初美
農村婦人の問題	楠瀬 佳子
専業主婦の状況	風呂本惇子
売春・人権・平和	大河内滋子
女性と放送メディア	片岡 陽子
	渡辺 和恵
	田丸 青実

◎ もち帰った資料

<英文>

- * FORUM WORKSHOP PROGRAMME (I) (II)
- # Office Opening Programme
- * FORUM '85 Activities List
- * FORUM85 (news paper)
Planning Committee of NGO, July 10-19
- * The Anivie, Special Issue, (News paper), July 1985.
- * Weekly Review, many voice, July 19, 1985.
The Weekly Review Ltd. Nairobi
- * Viva, Special Issue, July, 1985.
Bhushan Viayathi, Nairobi
- * Ecoforum, a Journal of the Eenvironment, Vol. 10
Liaison Center April. 1985 Nailobi
- * Women's Peace Alliance, Special International Issue
June, 1985 (England)
- * Women ... a world survey,
Ruth Legersivard 1985 (U. S. A)
- * Women in Agricultural Production (UN)

- **は 英文・仏文と同じ資料
- * は 冊子・本など
- # は リーフレット



絵 後藤

ケニア・アフリカ関係

- * The participation of women in Kenya Society
Kenya Literature Bureau, 1983
- * Credit position of Women in Kenya,
Kenya women finance trust Ltd. 1985
- * KAMBA Customary Law, D. i. Penwill,
Kenya Literature Bureau 1979
- * Sex and conception ,
African Universities Press, 1985 (Nigeria)
- * Women of Kenya, by Kenya Literature Bureau
- * The Kenyan Woman, Personal Growth Service Center
- * AFRICAN Women speak on female circumcision
by Babiker Badri Scientific Ass. for Women Studies
- * Women of southern Africa
- * Maasai, Kensta Nairobi 1979

中東 イラン・イラク

- * NISA'AL - ARAB
by The General Arab Women Federation
- * The Iraqi Women No. 3 1982/No. 9 1985
by Third World Centre
- * Islam's Verdict on Iran's Aggression, by Dar Al-Ma'mun
- * Front of head of the Ariteration liberation female of
the people liberation. by The Revolution Committee
- * Women in Israel
- * Women in Iran
- * Solidarity
- * MAHJUBAH - The Magazine for Muslim Women

北欧

- * A Women in Finland by The Conclil of Equality
- * Women and Men in Sweden
- * Swedish Assistance to Third World Women
- * A Presentation Fredrika Bremer Association (SWEDEN)

<フランス語> 資料

- * Guide des associations féminines
- * Citoyennes à part entière フランス政府刊行物
- ** Les femmes en France. Un chemin, deux étapes 1975-1985
- * Guide des droits du travail フランス政府刊行物
- * Forum d' idées ユニセフ刊行物
- * Forum ong 上記付録
- * Femmes et développement
- ** La situation de la femme en République fédérale d' Allemagne
- * Le Monde 新聞 85年7月15日号 西ドイツ政府刊行物
- * La place des femmes dans l' autosuffisance et les strategies alimentaires
- * Premier congrès de l' union nationale de la femme sahraouie
- * 23 interventions au debat général de la conference mondiale sur la femme

その他の国語

- * Im Blickpunkt der Berlinerir
- * 世界行動計画 摘電本 中国

西欧

- ** Women in France , One way, two stages
- * Women's Actions for Disarmament (Swiss)
- * Women in the Federal Republic Germany (W. Germany)

東欧・ソビエト

- * Women as producers and self-managers (Yugoslavia)
- * The role of women in the development socialist
sefe-managment (Yugoslavia)
- * Soviet Women Committee
- * Women in socialist society
- * Consumer Co-Operatives in the USSR

アメリカ大陸

- * Fidel Castro (Cuba)
-Interview granted to the Mexican Daily Excesion
-Interview granted to EFF News Agency
- * Insights from Field Practice (U. S. A)

アジア

- * Vietnam and the United Nations Decade for Women
- * Lao People's Democratic Republic
Lao Women's Union (LAOS)
- * SAMBODHII (Philippine)
- * Human Society part 1 (Philippine) 1984
- * A introduct on the institute for consulation and
legalid for Women and Families (INDONESIA)
- * Toword the elimination of Buraku and all other forms
of discrimination (JAPAN)
- * HANAKO... Japanese Working Women (Agora JAPAN)

国際婦人年「北区の会」

ケニア訪問日程

1985年7月10日(水)～7月21日(日)

旅程表

7月10日 (水)	大 阪 発	AI-307	16:30	香港、バンコック、カルカッタ經由 インドへ。 (機中泊)
7月11日 (木)	ボンベイ 着		03:15	着後、ホテルへ。休憩。 午後、ボンベイ市内見学(インド門、 プリンス・オブ・ウェールズ博物館など) (ボンベイ泊)
7月12日 (金)	ボンベイ 発 ナイロビ 着	AI-209	12:00 17:20	アデン經由、ケニア・ナイロビへ。 着後、ホテルへ。(ナイロビ泊)
7月13日 (土)	ナイロビ			NGO郊外見学 or ピース・テント (ナイロビ泊)
7月14日 (日)	ナイロビ			ボーマス・オブ・ケニア他 (ナイロビ泊)
7月15日 (月)	ナイロビ			NGOフォーラムに参加 (ナイロビ泊)
7月16日 (火)	ナイロビ			NGOフォーラムに参加 (ナイロビ泊)
7月17日 (水)	ナイロビ 発			キリマンジャロの麓、アンボセリ 国立公園への小サファリツアー (アンボセリ泊)
7月18日 (木)	アンボセリ			(アンボセリ泊)
7月19日 (金)	アンボセリ発 ナイロビ 着 ナイロビ 発	AI-208	08:30 12:30 19:00	NGOフォーラムに参加 (機中泊)
7月20日 (土)	ボンベイ 着 ボンベイ 発	AI-308	05:30 18:10	(機中泊)
7月21日 (日)	大 阪 着		12:15	

手配を担当しながら

西山 譲

昨年秋から帰国されるまで、会議参加の登録手続きから始まり、ホテルなどの手配と、右往左往しながら担当させていただいた9ヵ月でした。

皆さんは、多様な職業をもった方々の集まりでありながら、一人一人の専門性をよく生かした任務分担がされ、会議に向けての準備もとても良かったと思います。

なかでもあの英文・写真入りのパンフレットは出色だと思います。外国の方々にひっぱりだこだったことでしょう。

職業意識も強く、しかし、気負ったところがなく着実に行動していらっしゃるというのが私の印象です。「世帯をもっ」ていても「世帯じみて」はらず、女ばかりのグループに特有のいやらしさ「スミマセン」が感じられないということも特徴の一つではないかと思っています。とても気持ちよく担当させていただきました。

今後の皆さんのご活躍を期待しています。

(富士ツーリスト)

参加者名簿

	氏名	住 所	電話番号	団 役 職
1	川西渥子			団 長
2	後藤安子			カメラ・呼びこみ
3	田丸青実			ビデオ
4	寺本真名			事務局・司会
5	松村淑子			司会・Tシャツ マラリアの薬
6	一柳三貴子			Tシャツ係
7	金谷千慧子			ポスター係
8	中居成子			呼びこみ・受付
9	森良子			ドイツ語 事務局(会計)
10	片岡陽子			フランス語
11	渡辺和恵			ワークショップレポーター
12	石田法子			事務局
13	岡英子			通訳のアシスタント
14	山田初美			ポスター
15	大河内滋子			カメラ
16	森井久美子			車
17	小林明美			薬
18	神谷伸子			テープ録音 事務局(会計)
19	米家佐奈恵			事務局・司会
20	野田節子			ビデオ
21	大塚野百合			通訳
22	正路怜子			事務局
23	本多淳亮			顧問
24	楠瀬佳子			資料づくり
25	風呂本惇子			資料づくり
26	金森千鶴子			添乗員

あ と が き

参加者全員の感想ふう報告集になりました。
帰りの機内での原稿は、ホテル用せん・機内用紙など
さまざま。

あとから到着した長〜い文章、絵あり、カット
ありの原稿は、さすが北区の会の人材の豊富さを象徴し
ているようです。(！?)

紙面の都合で、編集委員が勝手にカットしたもの
あります。

ナイロビよりはるかに はるかに 暑い大阪の酷暑
の中での編集でした。

「それにしても、飛行機 落ちなくてよかったね。
インド航空の墜落も123便と同じ故障じゃないかって
いうじゃないの！」—— 生きている実感がこみあげ
てくる 臨時ニュースの中で……

この旅行団の事務局を担当していただいた 井上 和
さんからの原稿が、手違いで間にあいませんでした。

ゴメンなさい。

井上さんには、ニューズレター「JAMBO」の編集・発送、
NGOとの交渉、旅行の実務など、旅行団の大仕事をし
てもらいました。出発直前に、体調をくずして一緒に参
加できなかったのは残念でした。(K&K)

編集委員 金谷千慧子 米家佐奈恵 神谷伸子
 (片岡陽子 中居成子 一柳三貴子)



発 行

1985年 9月 1日

「国際婦人年北区の会」

大阪市北区西天満4-10-3
稲田ビル404

弁護士 川西渥子 方

